

新学習指導要領 「構造化と焦点化—中世を中心に—」

山口県公立中学校教諭

学習内容の構造化と焦点化によって もたらされる変化

(1) 「時代の特色」をふまえた「歴史の流れの理解」へ

現行の学習指導要領においても歴史の流れを理解させることが歴史的分野の目標とされてきたのであるが、新学習指導要領においては、現行の学習指導要領で併記されていた「各時代の特色」を、「我が国の歴史の大きな流れ」の理解のために踏まえる内容として位置づけている。このことと、中項目における「ねらい」と扱う「事項」の明確な書きわけ、さらに各事項を授業化するうえで必要な具体的な個別事象の設定によって、具体から目標までが明確に階層化された。このことは決して「各時代の特色」が軽んじられるようになったわけではなく、「各時代の特色」の理解なくして「時代の流れ」の理解には至らないということがはっきりと示されたこととらえるべきである。むしろ現行の学習指導要領よりも、授業者は、「時代の特色」と向き合うことを求められるようになったといえるであろう。

(2) 目標分析の省力化

新しい学習指導要領では、中項目の表記の仕方が「○○、○○などを通して、AがBであったことを理解させる」と統一された。現行の学習指導要領では、たとえば、右の古代の例に示すように、扱うべき事項が示されていなかったり、目標概念が「理解させる」や「気付かせる」と様々であっ

たりと、記述の仕方がまちまちである。これは、授業者が目標分析をする際に、大きなエネルギーを費やさざるを得ない要因の一つとなっていた。これが、新学習指導要領では、すべての時代において、取り扱うべき事項とそれを通して理解させるべき学習内容とが、同じ表記に統一され、非常に読み取りやすくなっている。このような構造化と焦点化によって、授業者が何をめざして授業をつくればよいのか、またどのような事項を扱えばよいのかといった授業のアウトラインを明確に描けるようになったのである。

学習指導要領の中項目の記述の比較(例)

| | 「古代までの日本」の文化に関する中項目 |
|----|--|
| 現行 | 国際的な要素をもった文化が栄え、後に文化の国風化が進んだことを理解させる。 |
| 新 | 仏教の伝来とその影響、仮名文字の成立などを通して、国際的な要素をもった文化が栄え、後に文化の国風化が進んだことを理解させる。 |

(3) ねらいと関連づけた事象選定の意識化

この構造化と焦点化によってもたらされるもう一つの変化は、授業をつくるうえで、授業者は、常にねらいとの関連性を考えながら個別事象を選定するという意識化が図られたことである。

これは授業者の教科書への接し方が変わることを意味する。実際に教科書を用いて構造化図をつくってみるとよくわかるのであるが、個別事象と個別事象の間の関係性よりも、個別事象とねらいとの関係性に意識が向けられるようになる。そう考えたときに、Aの事象でもBの事象でもねらい

に到達できるという重複に気づくようになり、結果として事象の選別が行われるようになるのである。当然、個別事象を選定する際には、目の前の生徒の既有知識や興味・関心を踏まえる必要がある。次に示すのは帝国書院の歴史的分野の教科書「中学生の歴史 初訂版」(以下、教科書)を用いて作成した構造化図の例である。

| | | | | | |
|--|--|--|-------|----|--------------------------------------|
| | | | 際的な役割 | の鐘 | (=国々のかけ橋)とあるが、琉球はどのような役割を果たしていたのだろうか |
|--|--|--|-------|----|--------------------------------------|

教科書に取り上げられている事象を活用した構造化図

| 大項目 | 中項目のねらい | 事項 | 個別事象 | 学習課題 | |
|-------|-----------------------|----------------------------------|--------|-----------------------------|-----------------------------|
| 中世の日本 | 武士が台頭して武家政権が成立したこと | 鎌倉幕府の成立 ・御家人制度を基盤とする鎌倉幕府が成立 | 平氏の滅亡 | 平氏政権は武家政権といえるか | |
| | | | 承久の乱 | 源氏が3代で途絶えたのに幕府が滅亡しなかったのはなぜか | |
| | 武士の支配がすでに全国に広まったこと | 南北朝の争乱と室町幕府 ・南北朝の争乱の中で室町幕府が成立 | 南北朝の対立 | 南北朝の争乱が60年近く続いたのはなぜか | |
| | | | 戦国大名 | 守護大名と戦国大名の違いは何か | |
| | 東アジア世界との密接なかわりが見られたこと | 東アジアの国際関係 | 元寇 | 元軍の撤退 | 暴風雨がなければ元軍を退けることはできなかっただろうか |
| | | | 日明貿易 | 倭寇 | 倭寇の衰退によって最も得をしたのはだれか |
| | | 琉球の国 | 万国津梁 | 万国津梁 | |

(4) 地域素材の教材化

新学習指導要領解説12ページの構造化図(部分例)を見ると、左端の目標から枝分かれしたツリーの一番右端にある空欄が目飛び込んでくる。これは、授業者に対して、「この空欄を埋めるのがあなたの仕事ですよ」という強烈なメッセージととらえることもできる。どのような個別事象を取り上げるかによって生徒の興味・関心が大きく左右されることはいうまでもない。そして、学習指導要領の目標を引き合いに出すまでもなく、生徒の興味・関心を高めるうえで重要な役割を果たすのが「身近な地域の歴史」である。しかしながら昨今、地域の歴史的事象を教材化した授業があまり見られなくなってしまった。そうなってしまった背景には、様々な原因が考えられるであろうが、地域の歴史と生徒を対峙させることは、単に歴史的分野の授業という範疇を越えて、自立した市民を育成するという社会科の目標をめざすうえで大切な要素であると考えられる。個別事象の選定が授業者の役割として明示されたのを期に、地域の歴史を構造化図に位置づける試みをスタートさせる必要があると感じる。次に示すのは、可能な限り山口県の事象を用いて構成した構造化図の例である。

地域の事象を活用した構造化図

| 大項目 | 中項目のねらい | 事項 | 個別事象 | 学習課題 |
|-----|--------------|-----------------------------|----------------|-----------------|
| | 武士が台頭して武家政権が | 鎌倉幕府の成立 ・御家人制度を基盤とする鎌倉幕府 | 壇の浦の戦い もともと | なぜ平氏は壇の浦で滅亡したのか |

| | | | |
|-----------------------|---|--|---|
| 成立したこと | が成立 | 長門の国は平氏の知行国であったが、源氏側につき従うものが多く現れた | たのか |
| | | 重源による東大寺再建 周防国が東大寺造営料国となったが在庁官人はかならずしも協力的でなかった | 木材の切り出し作業を妨害した大内弘盛に対して源頼朝はどのような指示を出したのか |
| 武士の支配がすでに全国に広まったこと | 南北朝の争乱と室町幕府 ・南北朝の争乱の中で室町幕府が成立 | 大内弘世 南朝方に味方し周防国を支配した大内弘世は長門国にも勢力を広げ北朝方に寝返った | なぜ大内弘世は南朝から北朝に寝返ったのか |
| | 応仁の乱後の社会的変動 ・各地に戦乱が広まる中で地方の武士が強くなったこと | *大内義興 大内義興が將軍足利義材を復職させ管領代として幕府の実権を握り、日明貿易を独占した | 大内義興が日明貿易を独占できたのはなぜか |
| 東アジア世界との密接なかわりが見られたこと | 東アジアの国際関係 | 元寇 | 異国降伏の祈祷 元寇が終わった後にも周防長門のおもな寺社で異国降伏の祈祷が行われている |
| | | | 元寇が終わった後に、長門周防の寺社で異国降伏の祈祷を行っているのはなぜか |

| | | |
|-----------|--|--|
| 日明貿易 | *大内義興 大内義興が將軍足利義材を復職させ管領代として幕府の実権を握り、日明貿易を独占した | 大内義興が日明貿易を独占できたのはなぜか |
| 琉球の国際的な役割 | 万国津梁の鐘 明との朝貢貿易を基軸として、日本、朝鮮、東南アジア諸国との中継ぎ貿易を行った | 万国津梁(=国々のかけ橋)とあるが、琉球はどのような役割を果たしていたのだろうか |

このように、地域の事象に注目して構造化していく中で、たとえば表中*の「大内義興」のように複数の事項と結びつく個別事象が浮かび上がってくることもある。この場合、一つの個別事象を用いた授業で複数のねらいにせまる授業が可能ということになる。歴史的事象を多面的・多角的に考察する学習活動を提供するという側面だけでなく、授業時数の確保という面からもこのような授業を開発していく必要がある。

2 時代の特色に気づかせる授業の例

ここからは、「大内義興」を個別事象として取り上げた授業の展開例を紹介する。

(1) 大内義興について

大内義興は、周防・長門・安芸・石見・豊前・筑前6か国の守護をつとめた戦国大名である。京を追われていた將軍足利義材を擁して上京し、管

領代として幕府の実権を握った人物である。1516年には幕府から日明貿易を独占する権限が与えられている。



大内義興像(龍福寺蔵)

(2) 授業の展開例

まず、授業者が勘合貿易の概略について説明した後「勘合貿易を始めたのは足利義満ですが、実際に貿易を行ったのは誰ですか」と問う。ここでは教科書p.69を資料として活用する。「大内氏などの有力守護や大寺社、そして堺や博多の商人」という記述に注目させ、この中に管領家の細川氏も含まれることを解説した後「これらの中で最後に勘合貿易を独占したのは誰だと思いますか」と問いかけ、大内義興の写真(上掲)を提示し、具体的な事実として1516年に大内義興が幕府より、勘合貿易を一任されたことを説明する。

そのうえで、

なぜ、大内義興が勘合貿易を独占することができたのか

と問いかける。ここでは教科書や資料集などを資料として自由に活用させ、生徒が考えをまとめる時間を確保する。

生徒からは次のような反応が予想される。

- ・ 山口が明に近かったから (地理的な視点)
- ・ 他の大名との争いに勝ったから(軍事的な視点)
- ・ 将軍に気に入られていたから (政治的な視点)
- ・ 大内義興が明と関係が深かったから (外交的な視点)

どのような意見が実際に表出するかは、生徒の持つ既有知識や手元にある資料によって左右されるものであるが、ここで授業者は、生徒がどのような視点に着目したのかということをしかりと

評価していきたい。そして、これらの視点で大内義興を分析し時代の特徴を整理していく。

| 視点 | 大内義興の分析 | 時代の特徴 |
|--------|---|--|
| 地理的な視点 | 西国の有力大名であった大内義興は周防・長門以外に筑前の守護も兼ねており、当時の主要な貿易港であった博多を支配下に置いていた | 当時の西日本には、博多、堺を中心とした貿易港や、倭寇の根拠地があり、中国、朝鮮との結びつきが強かった |
| 軍事的な視点 | 大内氏は「大内家壁書」と呼ばれる分国法を制定し、義興の父政弘のころから軍事力動員や軍費調達のための制度を整備した | 戦国大名が分国法を整備し、領国内を独自に支配するようになった |
| 政治的な視点 | 大内義興は管領代という役職について幕府の実権を握っていた | 応仁の乱以降、将軍の権力は弱体化し、全国で争乱が続いた |
| 外交的な視点 | 大内氏は倭寇を取り締まり、朝鮮との交易を行うことによって莫大な利益を上げていた | 明や朝鮮が貿易統制を行い、これらの国と関係を持った一部の大名が莫大な利益を上げた |

最後に、授業者は次の資料を提示する。

足利義材^き→足利義尹^{ただ}→足利義植^{たね}

多くの生徒はある時期の足利将軍の移り変わりにとらえるであろうが、これは、一人の将軍の名前の変遷である。ここから将軍足利義植の漂泊の人生について説明し、応仁の乱後の世の中の混乱ぶりを印象づける。そのうえで、応仁の乱後の時代の特徴について整理させる。授業の終末部において、時代の特徴をまとめる時間はぜひとも確保したい。授業者は、最終的には時代の特徴へと導くという意識を持ち続けながら授業を展開していくことが大切である。